

シンポジウム 哲学研究の比較

フランス現代思想における議論の新規性とは何か

千葉 雅也（立命館大学）

本発表は、フランスのポスト構造主義の流れを汲むものとしての「現代思想」（日本で「現代思想」と言われるときには、多くの場合その流れが想定されていると考えられる）の方法論を、発表者の研究・教育経験から考察したものである。おおよそ、次のように展開された。まず、ドゥルーズなりデリダなりバトラーなり、重要な「現代思想家」の研究（そのテキスト解釈）ではなく、みずから新たに現代思想的な言説を産出するための方法が示されることはめったにないが、それはある程度（そしてアイロニカルに）可能ではないか、という問題提起。そこから出発し、現代思想を「新規性」を競うゲームとして特徴づける見方へ。すなわち、現代思想のプレイヤーになるというのは、先行議論に対し「あざとい」までに差別化された議論を提示しようとする、すなわち新規性の設計に意識的になることである。最終的に本発表では、現代思想における新規性の四つの原則を暫定的に提示した。

差異・他者の原則：安定的なものとして承認されている先行議論から、何か X が陰に陽に排除されているという指摘を行い、それを前景化し肯定するための議論を構成する。

超越論性の原則：これは大陸哲学の共通事項であるが、先行議論に対し、より根本的にそれが条件づけられるレベルを想定することをもって、みずからの議論の新規性とする。

極端化の原則（ラディカリズム）：特定の論点を極端化し、思弁的＝投機的に新しいスタンスを仮設する。

狂気の原則：みずからの哲学言語を「症状」として引き受け、他の症状が豊富にあるという（非）理性の多元論をとる。これにより、非標準的な文体が選択肢に入ってくる。

こうした原則（これらの根本的な意味について、また、他に原則として挙げるべきことがないかについて、考察がさらに必要である）の合成により、現代思想的と言える言説の典型的パターンを描くことができるだろう。

本発表を終えて、以上の原則の一部は、現代思想に限らず、哲学研究において大域的に認められるものではないか、という思いが強くなってきた。今後もさらに多くの研究者と対話し、特殊に現代思想的な特徴とは何であるのかを考えていきたい（さしあたっては、とくに、狂気を積極的に考慮することは、現代思想に固有の態度であると思われる）。

現代思想においては、概念・議論図式の明晰性の追求、つまり、曖昧さやパラドクスを排除することよりも、いわば「発見法的」な意義をもつものとして仮設的にそれを提示することに重心がある。この点に関しては、そもそも我々の理性をどう捉えるか、そして、言語によって可能なことをどう捉えるかが根本的な問題としてあり、分析哲学との架橋を考えるにはそうした問題をめぐる対話が重要と考えられるが、今回の時間内ではそれは示唆するに留まった。